北海道の『心臓』と呼ばれたまち・小樽

OTARU HEART BEAT

「民（たみ）の力」で創られ蘇った北の商都

かつて小説家・小林多喜二が「北海道の『心臓』みたいな都会である」と表し、日本の近代化を支え「北日本随一の都市」であった小樽。現在、全国有数の観光都市となった小樽にも、「斜陽のまち」と呼ばれた時期がありました。その時、歴史の遺産を守り、活用し、まちの再生へと繋げたのは市民による「民の力」でした。

小樽が「北海道の心臓」となる契機は、北海道の内陸部で産出する石炭輸送のため、北海道初の鉄道が建設されたことです。明治中期以降、北海道への移民が本格化すると、増大する道内の人口を支える生活物資の供給基地として小樽は大きく発展。海岸線には移出入の物資を保管する石造倉庫が並び、仕事を求める人々が殺到する、ゴールドラッシュさながらの活況が出現しました。鉄道と港の整備により、豊富な北海道の資源の物流拠点となった小樽には、多くの商社、金融機関が進出し、最盛期には25の銀行が活躍した金融のまちとなりました。「色内銀行街」は、日本の近代建築を象徴する遺産が今も残り、往時の小樽を反映する象徴となっています。

小樽港は終戦後も復興の拠点となっていましたが、エネルギーが石炭から石油に変わる中で昭和40年代には取扱貨物が大きく減少、艀（はしけ）荷役の役割を終えて荒廃が進んだ運河を埋め立て、道路にする計画が決定します。その時、失われつつある「まちの記憶」を守ろうと市民による保存運動が起こります。10年にもわたる運動が訴え続けたのは「地域に生きるとは何か」というメッセージ。そこには港湾都市、商都としてまちをつくってきた市井の人々の誇りと伝統がありました。運動は、その後のわが国のまちづくり運動の先駆けとなり、運河の一部は散策路として整備され、市民が再びまちに誇りがもてる観光都市として再生しています。

小樽は終戦後、高度経済成長期の衰退においても「民の力」で再生したまちです。小樽に生きる人々が、遺産に新たな命を吹き込み、もう一度「心臓」の鼓動を動かす今の物語を感じることができるのです。

写真：小樽市総合博物館所蔵

天狗山からの眺望（小樽港）

小樽市総合博物館所蔵鉄道車両群

小樽港湾事務所みなとの資料コーナー所蔵防波堤関係資料

南浜地区倉庫群

色内銀行街

色内通り・堺町通りの商店

繁栄期の料亭・ホテル建築群

奥沢水源地水道施設

運河完成後の倉庫群

旧北海製罐倉庫（株）事務所棟・工場・倉庫

小樽運河

北海道の「心臓」と呼ばれたまち
OTARU

構成文化財の一部掲載

ふるさとの 歴史的 文化的 遺産『小樽運河』を守りましょう!!

「運河」は小樽っ子の誇りです!

—運河は残せます。いや残さなくてはなりません—

⊙運河はきれいに、立派に、よみがえります。

▽汚水汚泥と悪臭を、完全に処理しましょう。

——運河のよごれは、汚水処理・下水道完備・しゅんせつ・海水のじゅんかんによって運河は、きれいになります。

▽新しい都市空間＝市民の広場がうまれます

——運河は小樽っ子にとって歴史的、文化的最大の遺産です。「海の市民公園」として新しい息吹きをふきこみましょう。

▽小樽最大の観光拠点となります。

——運河は「ニセコ・積丹・小樽湾岸・国立公園」の入口にあたり、現在の魅力に加えて、もっと工夫をこらすことによってきわめてユニークな、すばらしい観光区域となります。

⊙運河は、けっして消えゆく老兵ではありません!

▽運河と石造倉庫の機能は、現在も利用されております。

——「運河も倉庫も、当分お世話になりますよ、他の港からもうらやまれているんです……」と港の業者は、いっています。

▽港の開発計画にとって、なんのじゃまにもなりません。

——市当局は「運河は港湾計画の上で最大のネックになっているだから埋めるんだ」といっていますが、それは事実に反します。四七年度の港湾計画でも、なんの関係もありません。

▽小樽の宝もの「運河」をつぶさなければならない理由は、なにひとつありません。ただ安あがりに道路を通すための案にすぎません。

⊙運河を埋めなくても道路はつくれます。

▽現在のところ、運河ルートしか臨港線は考えられない——とされておりますが、そんなことはありません。

——もっと機能的な臨港線ルートは、他にも考えられます。

▽バイパスをつくるのなら市街地をさけるべきです。

——いまの計画では、長橋住宅街を通るセンターバスになってしまいます。

⊙「守る会」は当局に、代案を提示しています。

①案＝「中央地下道計画」　②案＝「臨港・高架道計画」

③案＝「臨港・赤岩バイパス計画」＋③案＝「山手バイパス計画」＝

＋「小樽環状バイパス計画」

——守る会の代案は、港湾全体にも、観光、地域開発にも、市広く機能します。ふるさとづくり百年の大計にたちます。

⊙私たちは当局に、十分な再審議と設計の変更を考えていただきたいのです。

⊙その間、安易に運河を埋めることのないようつよくお願いしているのです。

運河の生いたちと意義

「小樽運河」は、計画から（明治二九年）工事完まで（大正十一年）、実に二七年の長い年月をついやして完成しました。

小樽港第一期の埋めたて事業の最後（現在の運河の出口）明治三十二年）の沖あいに、水路を残して新しい埋めたて道路を作ったのです。その次第が「運河」で、市内〇メートル、長さ約二千二百メートルです。

市の計画では、この六倍、港湾運河が七倍メートルを埋めたて、平面道路と高架の道路をつくろうというのです。

「運河」は、沖とまりの船から沿岸倉庫への はしけによる運搬路として、きわめて重要な役割をはたし、日本三番目の鉄道開設（明治十八年）とあいまって小樽港は、運河はもちろん日本第一最大の貿易港としてめざましい発展を遂げました。

（注）の倉庫や工場は、運河外の良材が、ふんだんに使われ、今日その文化財的価値は、きわめて高く、運河とともに、その保存保護を訴える学者や文化人がふえてきています。

日本にはその例をみないスケールの大きさと、その強い運営の魅力、そして海外の小樽関人の気運と発行力や沖のまのまに、私たち市民は、多くの学ぶべきものがあることを考えます。

「小樽運河」こそ、市民の誇り高い誇りうる小樽の歴史そのものであり、心のふるさとだといえましょう。

会員募集中

「小樽運河を守る会」

（大学生・一般市民一年会費一〇〇円）

発起人会々長　越崎宗一（23-8506）

世話人　堀井俊男（23-6326）

〃　米谷祐司（23-4530）

〃　藤森茂男（23-5233）

近く事務所をひらきます。それまでは、すこしの間、不便をお許しします。

小樽市総合博物館所蔵小樽運河を守る会関係資料

OTARU HEART BEAT

小樽

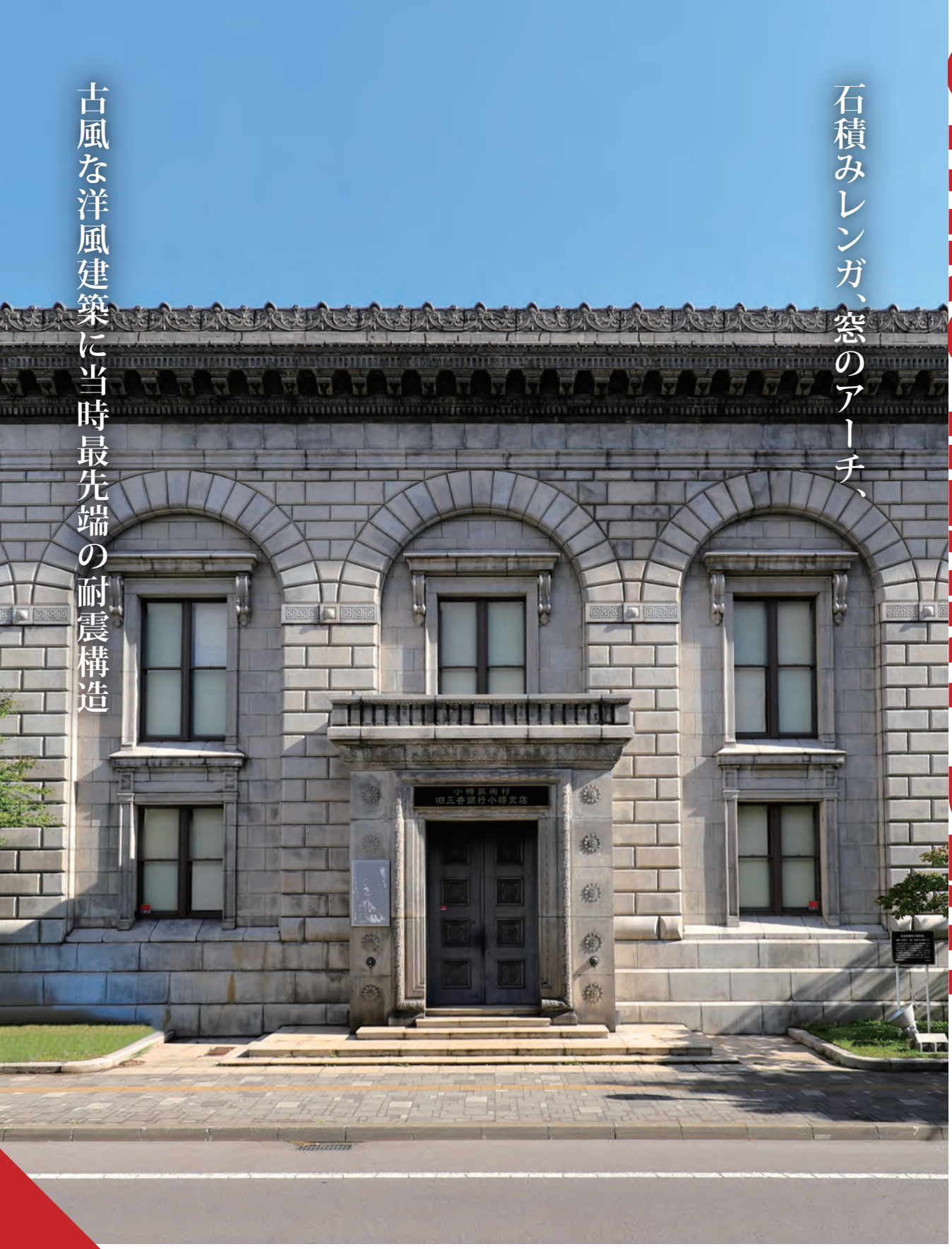
小樽運河を守る会関係資料と小樽運河

小樽を代表する景観、小樽運河。「民の力」で守り、再生の礎となった。

北海道の『心臓』と呼ばれたまち・小樽～「民の力」で創られ蘇った北の商都～

かつて小説家・小林多喜二は小樽のまちを「北海道の『心臓』みたいな都会である」と表現しました。北海道初の鉄道が開通し、明治中期以降、鉄道と港の整備により物流拠点となった小樽は「北日本随一の都市」へと発展。しかし高度成長期に衰退し、斜陽のまちとなります。その中で「まちの記憶」を守ろうと立ち上がり、「心臓」を再び動かしたのは、紛れもない「民の力」だったのです。

北海道の「心臓」と呼ばれたまち
OTARU



OTARU HEART BEAT

石積みレンガ、窓のアーチ、

古風な洋風建築に当時最先端の耐震構造

小樽 旧三井銀行小樽支店

昭和2(1927)年、工部大学校(現東京大学工学部)一期生の曾禰達蔵の建築事務所が設計。
小樽は、工部大学校一期生の3人(佐立七次郎、辰野金吾、曾禰達蔵)の作品が存在する唯一の地方都市。

北海道の『心臓』と呼ばれたまち・小樽～「民(たみ)の力」で創られ蘇った北の商都～

かつて小説家・小林多喜二は小樽のまちを「北海道の『心臓』みたいな都会である」と表現しました。北海道初の鉄道が開通し、明治中期以降、鉄道と港の整備により物流拠点となった小樽は「北日本随一の都市」へと発展。しかし高度成長期に衰退し、斜陽のまちとなります。その中で「まちの記憶」を守ろうと立ち上がり、「心臓」を再び動かしたのは、紛れもない「民の力」だったのです。

北海道の「心臓」と呼ばれたまち
OTARU

OTARU HEART BEAT

海を見渡す望楼を持つ
豪壮さ、華やかさともに
際立つ存在感

小樽

日本銀行旧小樽支店

明治45(1912)年、工部大学校(現東京大学工学部)一期生の辰野金吾らが設計。
金融の面でも北日本の中心となった小樽の象徴的存在。資料館として公開中。

北海道の『心臓』と呼ばれたまち・小樽～「民(たみ)の力」で創られ蘇った北の商都～

かつて小説家・小林多喜二は小樽のまちを「北海道の『心臓』みたいな都会である」と表現しました。北海道初の鉄道が開通し、明治中期以降、鉄道と港の整備により物流拠点となった小樽は「北日本随一の都市」へと発展。しかし高度成長期に衰退し、斜陽のまちとなります。その中で「まちの記憶」を守ろうと立ち上がり、「心臓」を再び動かしたのは、紛れもない「民の力」だったのです。

北海道の「心臓」と呼ばれたまち
OTARU

小樽産凝灰岩を用いた
国内最大級の石造事務所

OTARU HEART BEAT

小樽

旧日本郵船(株)小樽支店及び附属倉庫群(国指定重要文化財)

明治39(1906)年、工部大学校(現東京大学工学部)一期生の佐立七次郎が設計。
周辺の倉庫群を含め、商業都市小樽の姿を象徴する建物。

北海道の『心臓』と呼ばれたまち・小樽～「民(たみ)の力」で創られ蘇った北の商都～

かつて小説家・小林多喜二は小樽のまちを「北海道の『心臓』みたいな都会である」と表現しました。北海道初の鉄道が開通し、明治中期以降、鉄道と港の整備により物流拠点となった小樽は「北日本随一の都市」へと発展。しかし高度成長期に衰退し、斜陽のまちとなります。その中で「まちの記憶」を守ろうと立ち上がり、「心臓」を再び動かしたのは、紛れもない「民の力」だったのです。

北海道の「心臓」と呼ばれたまち
OTARU